

また古活字版の平仮名部分には連綿活字が多用され、一見極めて複雑な組版が行われていたように感じます。しかし、この六月四日、印刷博物館で奈良女子大学の鈴木広光さんが講演をされたのですが、近畿大学図書館が所蔵する小汀文庫旧蔵本の『伊勢物語』[※]を精査された結果、天地十二・五ミリほど、横十四ミリくらいの寸法が全角であって、連綿部分は天地寸法がその整数倍になっているということを報告されました。行間にはインテルも入って組まれているとのことですが、ということは正確に規格化された活字の駒があって、その規格に合わせて版下が作られ活字が彫られたと考えることが出来ます。句読点などありませんから、すべてはいわば「ベタ組」であって存外に単純な原理による組版と考えられます。つまり『徒然草』[※]の畫像で言えば、「人にいでましらはん事を思ひ夕の日に子孫を愛してさか行すゑを見んまての命をあらましひたすら世をむさほるこゝろのみふかくものゝあはれもしらすなりゆくなんあさましき（改行）」世の人の心まとはす事色欲にはしかず人の心はをろかなるものかな匂ひなどはかりの物なるにしばらく衣裳に薫物すとしりなからえならぬにほひには必心ときめきするものなり久米の仙人の」どありますが、「人に」「いで」「まし」が全角二倍、「ら」が全角、「はん」「事を」「思ひ」が全角二倍、「夕」「の」が全角、「日に」が全角二倍の活字を用いて、字間の込物なしでそれらをベタ組してあるということです。『伊勢物語』『竹取物語』[※]『平家物語』[※]（謡抄）『高砂』[※]などもそうしたベタ組による連綿組版という技法が用いられているように見えます。

キリシタン版はより複雑な組版となっておりますが、規格などの詳細は未詳です。一部のキリシタン版の紙面には緩やかに彎曲した行組版が見られます。これは木製のインテルが圧によって変形したために生じた版相ではないでしょうか。『ばうちずもの授けやう』[※]は小形鑄造活字をつかい行間にインテルを入れて『ぎやどべかどる』よりも前の時期の刊行で、大形鑄造活字がつかわれていますが、行間は込物なしのベタとなっております。つまり字間・行間とも込物なしのベタ組です。『ぎやどべかどる』[※]は世界最初の和欧文混植本です。私は東京外語大A A研の豊島正之先生のお供をして上智大学図書館とイエズス会の貴重書室で『ぎやどべかどる』を実見しておりますが、どうも二つのチームが作業していたと思えます。和文と横倒しになった欧文の揃え方を見ていきますと、二つのやり方が交互に現れています。上魚尾の上、下魚尾の下に小黒口のある「黒魚尾」チームの組んでいるところでは、右に欧文が寄って見えます。これはどういふことかと申しますと、行と行の間に、大体一ミリ弱ぐらいのインテルが入っておりまして、それで普通に一行の文字列の上から下までインテルを通しますと、和文と欧文の活字の寸法が同じだった場合、欧文はデイセクター、つまりベースラインより下の部分があるために、欧文のデイセクターの部分まで字面になる縦組の和文のなかでは右側に寄って見えます。それ

を補正するには行の左のインテルを切ってやって、右のインテルを足すことで、欧文活字を少し左にずらしてやればいいわけです。黒口の中が白く抜けている「白魚尾」部分で見えますと、そういう面倒な調整処理を最初からやっていきます。「黒魚尾」になるとまた何の調整も無しに戻るので、つまり二つの組み方の規則というのが交互に現れるという状態になっているわけで、それが、あるところまで来ますと、「黒魚尾」側が「白魚尾」側に学んだのかと思われませんが、ピタリと「白魚尾」の方のいいねいな処理法に従ってきます。ここからも複数の人間が仕事を分担していた有様が分かります。

古活字版の最末期といえますか近世木活字版への過渡期には明朝体の活字が現れてきます。図一九は京都の田原仁左衛門が刊行した『仏国録』と『建長録』という大本ですが、この二標目とも、使用されている活字や字詰め、行数、インテル寸法、匡廓、版心などの組版仕様は共通しています。ところで江戸期に庶民が明朝体の書物を読んだりすることはまずありませんでした。つまり明朝体は智識階級だけが読む文字だったわけです。

次はちょっと珍しい版相を持った近世活字版をご紹介します。『落くば物語』という大本です。通常の匡廓ではなく飾り罫が用いられています。行草と仮名だからといって、これも庶民の手にする本ではありません。大本という判型自体からして、豪華で贅沢な特別な存在であって、庶民の日常とは無縁の存在だったのです。

近世木活には古活字版のような美本はあまりありません。ここでお見せするのは幕末の『欧西紀行』^三という、ヨーロッパ紀行を記録した書物です。近世活字版としては出色の凝った版相です。お見せしている丁は草体を使っていますけれども、別の部分は明朝体の漢字だけだったりします。それから、一部の仮名は連続活字、文字いくつかで一本の活字となっています。匡廓に切れ目がないじゃないか、と思われるかも知れないですけど、こういう書物の場合でも何十丁も匡廓の隅を見ていきますと大抵どこかに切れ目が見えます。先ずそもそものが匡廓の切れ目がほとんど見えない活字版自体、非常に珍しいものです。『近世活字版図録』とか『近世活字版目録』、これは活字版を研究するための基本文献中の基本文献として、これらにまるで眼を通すこともなしに木活について云々するという人がいたら、そもそも論外なのですが、だいたい昔にその版元である青裳堂書店の御主人後藤憲二さんと話をしている、私がときどき匡廓の切れ目が見えない木活字版があると申しましたら、イヤそんなことはないよとおっしゃる。ヒート何丁も何丁も見えていくと必ずどこか見つかるものだと言われて、確かにやっていくと、大抵の場合、見えてくるんです。

遂歛衣就座問蒼不錄乃云靈山密付不在微笑邊
少室單傳不在安心處絕毫絕厘時如山如嶽如嶽
如山處絕厘絕毫直得刮龜毛於缺牛背上截兔角
於石女腰邊左旋右轉風行草偃正按傍提星飛電
激正恁麼時還當得從上宗乘麼良久千重百匝俱
粉碎倚天長劔逼人寒

舉初祖達磨大師逾海越漢爲法求人少林九季冷
坐深雪中得一箇末後問它所得只禮三拜依位而
立大師云汝得吾髓遂以衣法俱付日上座近日見
建長泊問所得無語而可對無理而可伸直得一場

★圖一九「仏国録」(二六頁)と「建長録」(二七頁)の、いずれも一
ウ……「仏国録」の内題は「仏国禪師初住下野州東山雲巖禪寺語録」、
版心題が「仏国録」。(京都) 田原仁左衛門、寛文四(二六六四)年

十一月。「建長録」の内題は「仏禪師住日本国相州巨福山建長禪寺語
録」、版心題が「建長録」。(京都) 田原仁左衛門、寛文四(二六六四)
年十二月刊。

無人

師乃云祖師逾海越漠而至中華有大法可傳今日
日本平將軍遠招山僧山僧不知有甚巴鼻良久顧
視大衆云所以道羽嘉生應龍應龍生鳳凰鳳凰生
衆羽但看雲駛月運莫說舟行岸移諸人若也會得
朝朝相見其或未然遠引孤帆不勝依戀

結座世路艱危別故人相看握手不知頻今朝宿鷺
亭前客明日扶桑國裏雲

弘安二年八月二十一日入院

指山門云兔走鳥飛山高水急一步不相到把手

いまれむうし申能なる人の出むすめあまのま
ちたまへかおハ一き女君申君よハむことりして
西のさい初んう一のさよとれくとしてとま
とあてまつりあまのこにの君もよせきりなもん
とでがしつさそ一あふ付くりよひあひたり
さううとかりはらの君とて母あまはむせめお
もせふのりふやいうおもしりんつううまつる
きこられ救またよおやさきあんとんのまらちい
てのまこ一まなる西のおちちやあるふのあふ
かふおあんをませあひりるまんとちちもいもれ

★図二〇「落くば物語」……最終丁末尾に「くはん政六つのごし神無月初三日」という刊記がある。「近世木活」青裳堂書店古書目録」（青裳堂書店 平成二二一九九〇）年初夏より。

より固よ山毛なるぬはむなりまうくよま
の世帯る世以とぬこりか

むりまうく世のうひぬなり旅衣袖振わ
るるふそつ羅以狩友とちより馬能まぬ
事よとと贈れる度奇大和奇か一書付る

松平忠敏

西の海子宜能浪踏をゆきまうととゆりき
備せと思ふ斗りそ 小川為儀
あき出る舟踏をうやまうくとも屋まう

木活字版は明治になって作られ続けました。相撲の勝負附は大正のものが残っています。実は昭和の十年代にも木活字版はありますし、昭和二十年代にも出されています。ただ、それはもう完全に趣味の世界で、実用のものではありません。実用のものとしては、普通の鑄造活字による組版の中に不足字つまり外字のみ木活字が使われるということが近年までありまして、精興社タイプを手掛けた君塚樹石の甥の君塚孝雄さんなどはその彫刻師でした。

明治初年の官員録や職員録の木活字版、これをいくつかお見せしたいと思います。これらは整版と木活とを見分ける訓練には実に好適なものです。

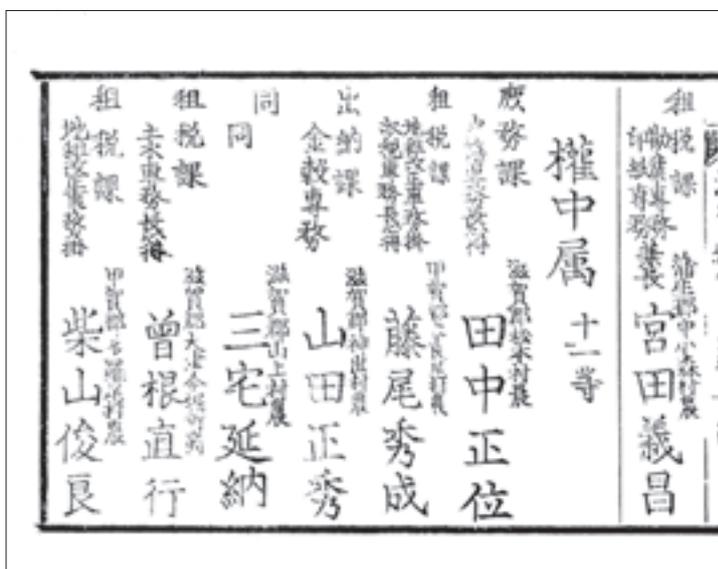
まずは明治八（一八七五）年の『滋賀県官員録』。中本を横倒しにした横本です。木活というのは一筋縄ではないもので、いろんなものがあります。この資料はどういうふうになっているかと言いますとおそらく「庶務課」とか「租税課」「出納課」の三字一組で一本の活字です。それから「戸籍専務長心得」「土木専務長心得」、これもおのおの一組です。それからどうも住所身分と個人名を含めて一本になっているように思われます。明治初年の官員録や職員録には、こういう連続活字、ブロック活字を使っているケースが多い。なぜかといいますが、個人名と住所身分というのは一体で、それと職務との組み合わせがあるからです。一体に作っておけば来年も再来年もずっと使い廻しがきくと考えているわけです。匡廓の切れ目もはつきりと水平もしくは垂直に抜けています。

次は明治七（一八七四）年の『度会県官員録』。横本のこの判型を美濃三つ切りといっています。度会県は今の三重県の南半分くらいですが、明治二（一八六九）年にできまして明治九（一八七六）年には廃止された県です。有界ですね。見ますと界線の内側の長方形のブロックを一体に作っています。その人が別の部署に移ったら、ブロックごと移すわけで、長方形のブロックと界線と匡廓と丁付からできているという木活字版です。

次は明治四（一八七二）年十月の『名古屋県官員録』。これも美濃三つ切りで、明らかに木活なんです。これも連続活字、連柱活字を用いています。匡廓の切れ目もはつきり見えます。版心も丁付以外がワンブロックであろうと思われれます。

次は明治七（一八七四）年二月の『新川県職員録』です。新川県というのは越中で、富山の近くにありました。あまりにも酷いムラですが、これも連続活字を使っています。御覧の丁では匡廓の切れ目が殆ど見えていませんが、別の丁を見てみるとやはり切れ目があって匡廓が組み合わせであることが分かります。

★図二二「滋賀県官員録」。琵琶湖新聞附録。明治八（一八七五）年五月改正。



★図二三(上)「度会県官員録」。表紙に「七月改」「三十一日改」と捺印。
 ★図二四(中)「名古屋官員録」。末丁裏に「新聞会社」の捺印がある。
 ★図二五(下)「新川県官員録」。一才に「明治七年二月改」とある。

| | | | | | | | | |
|---------------|---------------|----------------|--------------|---------------|------------|---------------|---------------|---------------|
| 高知縣士族 尾崎行正 | 度會縣士族 押川 巨 | 度會縣士族 小笠原常樹 | 十等出仕 藤堂源助 | 度會縣士族 藤堂源助 | 少屬 上田 實 | 度會縣士族 上田 實 | 日向縣士族 小野道一 | 栃木縣士族 佐藤 幹 |
|---------------|---------------|----------------|--------------|---------------|------------|---------------|---------------|---------------|

| | | | | | | |
|----------------|-----------------------|-------------------|-----------|------------|------------|-----------|
| 犬飼 敬磨 犬養 兼磨 | 陸軍少佐 千賀與八郎 越智信立 | 權少參事 中根 茂 平 忠富 | 肥田 鐵六源 忠民 | 水野 彦三郎源 忠雄 | 荒川 彌五衛源 定英 | 荒川 官三源 満忠 |
|----------------|-----------------------|-------------------|-----------|------------|------------|-----------|

| | | | | | | |
|---------------|------------|------------|---------------------|-------------|------------|----|
| 十三等出仕 伊藤園輔 | 山口 波谷孝常 | 新川 鈴木直道 | 編輯 十四等出仕 山本高明 | 新川 十五等出仕 | 編輯 岡田重家 | 新川 |
|---------------|------------|------------|---------------------|-------------|------------|----|

『毎日新聞』の前身である大新聞の『東京日々新聞』も二年ほど木活字組版で作られていました。『東京日々新聞』は整版で創刊され、第二号からしばらく鑄造活字を採用、ついで木活字になり、また鑄造活字に戻っています。ここにお見せする図版は極く最近入手した木活字時代の『東京日々新聞』です。

鳥山啓が明治初年に「かなぶみしや」というグループを作って刊行した『だいのよみほん』『だいのよみほん』『さうりいちろく』『しよへん』『つうぞくかみよのまき』『ちりうひまなび』『さあせんとものがたり』『でんしんきようぶん』などにも木活字が用いられています。図はかなぶみしや版の『じつり』をしへばんと『ちりうひまなび』です。

東京日々新聞

第二百五十三號

太陽印刷社 大正六年一月六日

西洋紀元一十八百七十二年

月曜日 癸卯年十二月十五日

公開

罪案凡例判額有相減ル其序

罪四前ニ在リ法ヲ案シ罪ヲ定ムルニ
 其以テ擬議論定スル所ノ者一ノ供狀
 ニ據ルノミ然レバ則一字之上一言ノ
 下ニシテ生殺ノ命定マル供狀ノ係ル
 所並容易ナランヤ抑從來各府縣取具
 スル所一定ノ體裁ナク杜々其要領ヲ
 得ザル者アリ故ニ今供狀ヲ以テ罪案
 トナシ一字一言ノ際モ勉テ必ブ去テ
 簡一就キ庶ヲ紛子潔ニ從ヒ勉ニ公其
 情ノ由テ起ル野ヲ顯ハシ中ニハ其意
 ノ在ル所明ニシ終ニハ其吏ノ既ニ
 成レル所ヲ詳ニシ而シテ之ヲ作上ニ

ルニ當港ノ如キハ元來警防ヲ貴重ノ
 業ト心得中ニモ其上等ナル者ニ至リ
 テハ父母ニレテ欲シ解入コレヲ禁ト
 スルノ風俗ナリ曩日此布令下リシ時
 官廳口實ノ抑沙汰ニテ或ル寺院ニ五
 百余名ノ娼妓ヲ召出サレ娼と大旨ノ
 趣ヲ御説諭アリシカ其内ニ集ルモノ
 抑眉花類アリ形髮妝臂アリ或ハ娼態
 ノ可憐或ハ老嫗ノ可憐ソノ風景恰モ
 寒梅野棠ヲ一時ニ見ルカ如シ此五
 百名ノ内ニモ偶々佳麗芳約アリテ迷
 ニ改業セント願フ者ハ百ノ二三ニワ
 タ大抵ハ旧業ニ安シ度ニ耽戀トシテ
 出願セリ實ニ風習俗トハ乍申可敷ノ

下是現報えんと欲せり

勢洲市町備前屋小三郎なる者ハセ
 名海内ニ聞ヘトシ如家也徳卷の娼婦
 歌妓入中餘名有り一が先般半奉講儀
 の布令改奉業一迷ニ親元へ改返なせ
 二際一多年養育の情致以各其迷道或
 量リ旅費手當ト一て金三圓より一圓
 詰を與ヘトシ是亦於て娼婦の父兄其
 懇切現察謝下野菜魚肉等賜送る者
 有りト是戸主小三郎及び養子法法ガ
 赤心よて出る所ニ此まじりハ神宮能叙
 開校より一日の太席々々總開又出ル
 るハ近傍の者能々之を知ると娼守此
 女子の如きハ半奉七折と云ふ

ろはふへとちりぬるまわかよたれそつねおらむうわのおくやまけふ
 めいち六ねん十ぐわつ かみ 二ぱつ
 くわんまよ 若も
 志づのちへん
 かあふみあや ざうはん
 ろはふへとちりぬるまわかよたれそつねおらむうわのおくやまけふ
 たよかわるぬりちとへぼふはろ
 れそつねおらむうわのおくやまけふこえてあさきゆめみえあひもせずん

★図二七「じつやをしへぼん」(三三・三四頁)……(大坂)なぶ
 みしや、明治六(一八七三)年十月、国立国会図書館所蔵。なぶみ
 しや版の判型はすべて中本、また「でんしんきょうふん」以外のい

すれのなぶみしや版も、整版の序を除き、題簽や見返まで含めて文
 字はほぼ二号大と四号大の二種の平仮名活字のみを使用している。

おつどり を若へぼん かみの まぎ。

○ひらがあ かたかあ の けいこ。

○ひらがあ

いろはふほへと、ちりぬるをわか。よたれて
つねあ。らむうぬのおく。やまけおこえて。

あさきゆめみさ、ゑひもせず。

○かたかあ

ちりうのまふび まよへん かみの まき

とりやま ひらく やくす

ちの かたう

おのがすみかとするいへやまきは、すみずみまでその
のあふいをあらざるべからず。われこれのたいち
をすみかとおもをれば、ちのかたちせいのありさ
まをまかつてあらざるはひとのひとたるかひ
もあらず。そのこれをときあかすおくもんをちりがく
といふ、あかればわれこれかあらずちりがくをまふはず
ばあるべからず。〇すべててまりけまりのごとくかたち

★図二八「ちりうひまなび」(三五・二六頁)……とりやまひらく訳
(大坂)かなふみしや蔵版、明治七(一八七四)年官許、図版が多く
かなふみしやの木活字版諸書の中で最もヴァジュアルな造作の書物。

まじう



まるきものをたまといひ、からのこ
とばふてこれをまじうといふ、このだ
いちもまりのごとくまるきものゆゑ。
これをまじうとふづげたりあかれども

ちまじうはおはきふるものゆゑたじめふみるとき
は、そのこうばいあることはころろつかざるふり、ゆ
ゑふものりをかんにさるひとはちたひら
ふるものやうふおまふべけれど、まことふはま
るきものふさうぬあつ、まじうをひとつふたつ
あぐべゑ、あひとあようきせんふのりてよごはまを

先に触れました福沢諭吉・小幡篤次郎の『学問のすゝめ』^{★四九}の初版も活字版です。初版は、かなりの稀観本として国立国会図書館にはなかったと思います。あまりに線がきつちりと出ていますので、金属活字だろうと言われています。仮名を比べてみますと、全部似ています。似ているんですけれども、重ねてみましても絶対にピタリとは重なりません。つまりこれは、鑄造活字ではなく彫刻活字なんです。どういうわけで、金属製の彫刻活字という非常に珍しいものだったんではないのかと言われてきました。最近気付いたのですが線がきつちり出るか掠れるかは、活字の材質以上に、どうも紙質が関係しているようです。ですから極めて硬質の木活字であった可能性も捨てがたいと思います。本の一番最後の部分、端書の末尾に、「慶応義塾の活字版を以てこれを摺り」云々、という文章が載っています。

★四九「学問のすゝめ」端書末「明治四年／未十二月／福沢諭吉／小幡篤次郎／記」(三七・三八頁)……富田正文『福沢諭吉書誌』などに明治五(一八七二)年二月の刊行とされている。中本。なお『学問のすゝめ』の活字と書風が近似する資料に「慶応義塾読本」(慶応義塾、明治四(一八七一)年)の表紙がある。版相からして木質の版による印刷とは思われず金属版と推察されるが、活字によるものか、あるいは金属ブロックの彫刻であるかは判然としない。

学問のすゝめ

福沢 諭吉

小幡篤次郎

同著

一天ハ人の上ヨ人を造ルむ人の下ヨ人を造ルむとハ
へりさきバ天より人を生するヨハ萬人ハ萬人皆同
ト位ヨして生るるボク貴賤上下の差別なく萬物の
靈た身と心との働を以て天地の間ヨあるもろづ

端書

此度余輩の故郷中津に學校を開くは付學問の趣意を記して旧く交りたる同郷の朋友へ示さんがたり一冊を綴りしむ或人其を見えて云くこの冊子を獨り中津の人へのみ示さんより廣く世間へ布告せば其益も亦廣かるべしとの勸は由り乃ち慶應義塾の活字版を以てこもを摺り同志の一覽は供ふるなり

明治四年

未十二月

福澤 諭吉

小幡篤次郎

記

また鑄造活字なのですが、刀で仕上げをしたものもありません。★図三〇東京帝国大学医学部の前身である大学東
 校官版に用いられた金属活字がそれで島霞谷という人が発明したものです。父型は黄楊、母型は楊材で、
 そこに鑄型を立てて鉛合金を流し入れるという簡便な製法で作られた活字です。鑄造活字なのになせ仕
 上げの工程が必要なのかというと、東校官版に使われました活字は確かに鑄造活字なのですが、要する
 に「不完全な鑄造活字」であって、鑄造した状態でそのまま使うことはできません。刀を入れて最後に
 仕上げをやらなきゃならない。そこで活字の仕上がりが一字ごとに微妙に変わってしまう。桐生市にブ
 ツそのものが残されていたおかげで、仕上げの各段階まで我々は知ることができたわけです。島霞谷の
 活字の実物が、十数年前ではなかったかと思いますが、霞谷のお孫さんの家の土蔵の中から数百本出て
 きました。それで桐生市まで調べにいったんですけれども、活字ソノモノが出て来ているということも
 ありませんし、実際に印刷博物館に今陳列してあります霞谷の活字の中で印刷物と明確に一致するものも
 見つかっていませんから、これらが活版であることは間違いありません。ただこれを鑄造活字であると言
 い切るためには実物が出てこなければ非常に難しかったらと思います。



★図三〇……手前三本が島活字の仕上げ過程の各段階
 島活字 島家所蔵・印刷博物館寄託

図三一は明治三（一八七〇）年から四（一八七二）年にかけて出されました大学東校官版、その一つで『日講紀聞』という本です。

次もやはり東校官版ですが、『虎烈刺論』^{ニホウ}。石黒忠篤という、明治の医学界の大立者ですが、彼が若い時分に書きました本です。東校の活版本の中では一番よく古書市場に流通する標目として数万円以下で買える可能性があります。

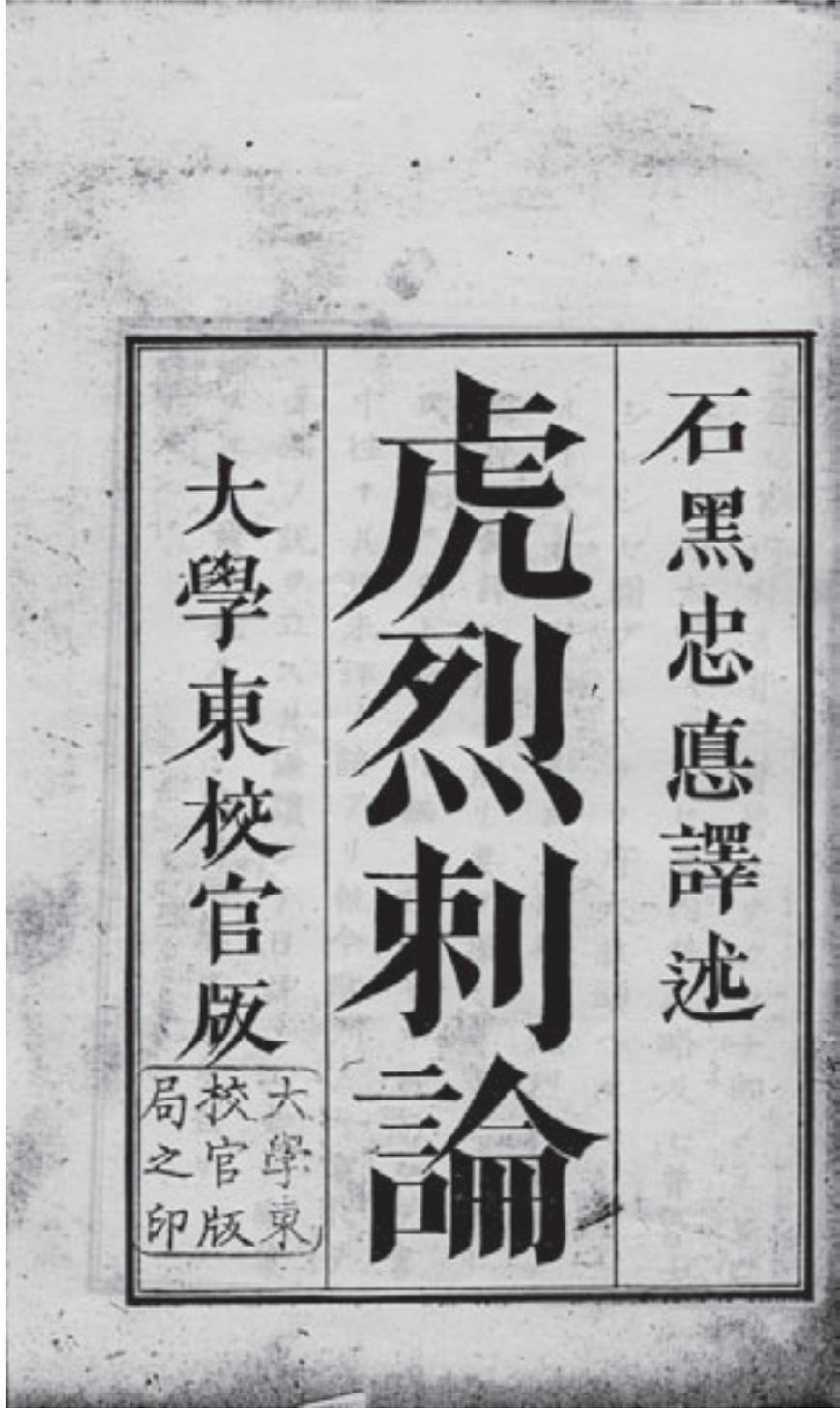
一番珍しくて高価なのは『リユンドルペスト説』^{ニホウ}でして、これは整版の表紙を入れてもわずか五丁ばかりで紙縫綴の片々たるパンフレットなのですが、これが始めて出てきた時には、私は古書肆に十八万円を払ったことがあります。しかし、まことに悔しいことに昨年、小宮山博史さんが三千五百円で古本屋の目録に載っているのを見つけられました。それを含めて、今、私が知っている限りで三冊の現存が確認されています。昔の開成所——幕府の洋学系教育機関であります蕃書調所を洋書調所に変え、次は開成所と名前が変わります——から受け継いだ活版印刷機等が東校にはあったといわれています。東校官版中の活版本がその印刷機で刷られたものかという点、非常に微妙です。和紙をつかって片面刷り、袋綴じ、四つ目の線装なんです。半紙本の一丁と言えば結構大きなものです。それをプレスにかけて、和紙を使って、ここまですらなく刷れるかという点、多分無理だろうと嘉瑞工房の高岡重蔵さんがおっしゃっておられました。そうしますと、整版のように馬棟^{ばだて}で刷ったか、足踏みで均等に圧を加えていったかの、どちらかだと思います。インクと紙質の相性もうまく行っているようで、一番ムラが目立つのは『リユンドルペスト説』ですが他の本は非常に印刷状態が良いと思います。

入り或ハ左根ヨリ右根ニ聯ナリ左眼ヨリ右眼ニ
連ナリテ交貫セサル者アリ其状猶圖ノ如シ此ノ



如ク交貫スルヤ又更ニ左右ヨリ
斜行ノ眼球底ノ正中ヨリ稍下際
ノ處ニ接ス但シ此根腦内ニ在テ
ハ平扁帶條ナレ其腦外ニ出レ
ニ隨テ漸ク圓柱形ト成ル其他此
根幹ノ斜行交貫スルニ由テ微展縮緩急ノ餘地ア
レハ仍令眼ニ劇シキ外傷ヲ受ルモ亦之カ爲ニ視
神經ニハ聊カモ恙ナキアリ

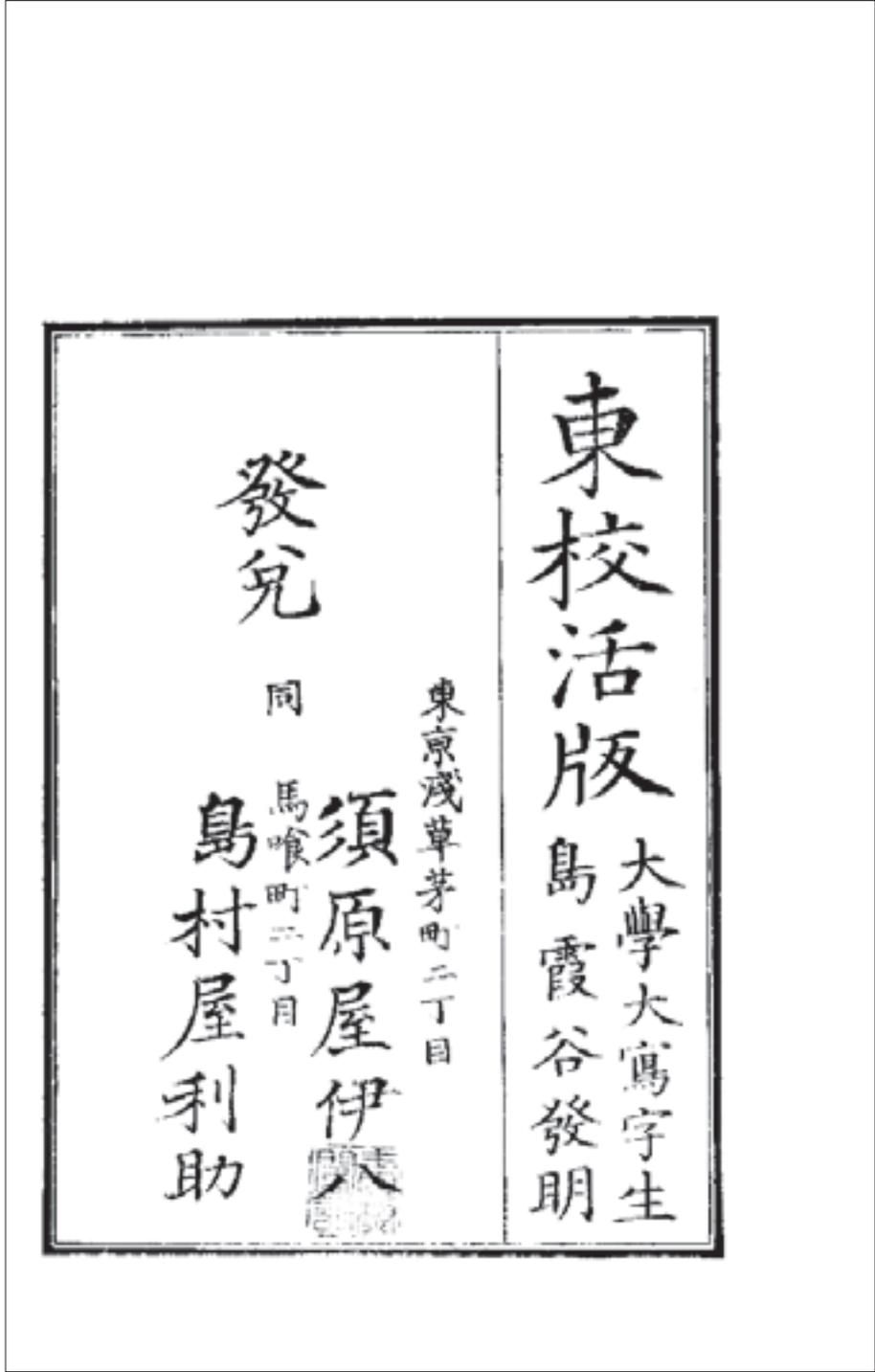
★図三二 大学東校版「日講紀聞」……四周双辺。半紙本。刊記はないが明治四（一八七一）年刊と推測される。



★図三二 大学東校版「虎烈刺論」(四二〜四四頁)……四周双边。半紙本。恐らく明治四(一八七二)年刊。

不拔ノ確論ト謂フヘシ設令ハ甲ノ邦ニ於テ一人
始テ輕症ノ尢烈刺ニ罹リ其病者更ニ乙ノ邦ニ旅
行シテ其病既ニ癒シモ甲ノ邦ニ於テハ方ニ六ニ
流行シ其原由ヲ尋ヌレハ曩ニ旅行セシ病者嘗テ
上リシ厠ヨリスルヲアルハ數々目撃セル所ナリ
昔人ハ此病流行ノ方向ヲ察シ或ハ西ヨリ東ニ波
及シ或ハ東ヨリ西ニ波及シ或ハ風氣ニ順ヒテ來
リ或ハ風氣ニ逆ヒテ行キ其迹一轍ナラサルヲ一
疑團トセリ然レモ今以上ノ説ニ據レハ疑團忽チ
渙然タリ況ヤ近年蒸氣車火輪船アリテ以來ハ數

シキハ他邦ニ賦役セラレシ兵卒瓜期至リテ本國ニ歸リ途上ステツチンヲ過リシ時其地ニ此病專ラ流行セリ其兵卒マーグデンビユルアニ旅泊シテ復他邦ニ赴シカ其出立セシヨリ一週ヲ經テ後大ニ流行セリ就中ケレイフスワルトハ家屋蕭疎人口寥寥ノ地ニシテ是等ノヲ探ルニ便ナリトス此病偶此地ニ流行セシ故詳ニ其起原ヲ探討スルヲ得タリ其最初ニ病シ甲人ハ曩ニ宿セシ兵卒ト厠ヲ同フシ次ニ病シ乙人ノ家ハ甲人ノ家ノ溝瀆ニ接近シ其次ニ病シ丙人ハ乙人ト同居セシ



東校活版

大學大寫字生
島霞谷發明

東京淺草茅町二丁目

須原屋伊八



發兌

同

馬喰町三丁目

島村屋利助

★図三三 半紙本の大学東校活版本の奥附……整版。

リユンドルベスト説

大學少助教石黒忠惠 述

リユンドルハ角獸類ベストハ時疫ノ義ニノ即チ
獸類傳染病ノ義ナリ和蘭レーデン府第一等獸畜
醫ステーダルワルド氏所著家畜治療書ニ其症狀
并ニ病屍解剖説ト治法トヲ載セタリ近日上海在
留外務省出張官員ノ報知ニ由レハ今年此病專ラ
シメリト地方ニ行ハレ之カ爲ニ獸畜ノ斃ル、ト
甚タ多シト云フ蓋シ牧畜盛ナル地ハ一牧場ニ數